

【論文】

温泉観光地箱根におけるミュージアムの集積過程について

鈴木 なつみ

I はじめに

1. 研究目的

本研究では、歴史ある観光地である箱根町においてミュージアムが集積していく過程を明らかにすることで、箱根町や神奈川県における今後の博物館関連施策や観光産業に寄与することを目的とする。

現在、歴史系博物館や美術館、自然史系博物館といった博物館施設は、貴重な文化財や学術資料の収集・保存・研究機能や、資料の展示という「モノ」を通じた学習機会を設けるという教育的機能のみならず、観光の対象や地域交流・地域文化の発信拠点といった、多種多様な役割を担っている。このような博物館の持つ機能や博物館の今後の展望、日本の博物館史、保存や展示の新しい方法などの実務的な研究は、これまでに数多くなされている。たとえば椎名（1993）は、明治以前から存在した蔵のような博物館に類似した機能を持つ施設の変遷、近代博物館の概念が輸入された明治時代における国の施策、そして近年における博物館界の新しい展開まで、その歴史を詳細に述べている。伊藤（1993）は博物館を目的の相違によって「地域志向型」「中央志向型」「観光志向型」の三つに区分している。「地域志向型」は地域の人々のさまざまな課題に博物館の機能を通じて応えることを目的とし、ものを考え、組み立て、表現する能力を育成することが教育の中心である。「中央志向型」は知識の教授が教育方法の中心であり、「観光志向型」の調査・研究と教育方法の軸は資料の持つ希少性、意外性、人気性であるとしている。

特定地域における美術館の集積を扱った研究は、古本（2014）の研究が詳しい。この中では、何らかの作品を5点以上展示し、一般に開放されている施設を「美術施設」と定義し、高原観光地域である静岡県伊豆高原地域と長野県安曇野地域における美術施設の集積過程を明らかにしている。この2地域における美術館の設立ラッシュが起こった背景要因には以下のような共通するプロセスが見られる。まず地域において一定量の別荘開発が行われ、移住者が現れる。そして地域住民・移住者の中で、芸術活動に対する関心を持つ人物が活動を始めたこ

とがきっかけとなり、地域内にいくつかの美術館が設立される。次にそれらの施設と芸術関係者がコミュニティを形成し、アートイベントの開催やさらなる美術館の設立といった活動の活発化により、「芸術」という地域イメージが創出され、芸術の観光資源化が展開される。これが集客力の向上という効果を創出し、バブル経済による開発ブームも相まって新しい施設がまた設立されていく。集積が進むにしたがい、展示物の「質」や施設構成における観光地域間の同質性への批判、入館者数の分散・減少に耐えられない施設の閉館など、新しい課題が生じてくる、というものである。

しかしこのような博物館の地域ごとの歴史やその立地に関する研究はいまだに多くない。特に温泉地として長い歴史を持ち、日本の観光地の中でも重要な位置を占めてきた箱根町においては、多種多様なミュージアムが町内の特定の地域に集積しており、これらのミュージアムは温泉や芦ノ湖、大涌谷といった従来の観光スポットに続く有力な観光資源として人々に認知されているにもかかわらず、この地域のミュージアムについて正面から研究したものは少ない。このような古い歴史を持つ観光地において、比較的新しい観光資源であるミュージアムがどのように集積したのかについて、その過程を調査することには一定の意義があると考えられる。

2. 研究方法

古本（2014）の研究は、芸術に関心を持つ人々が形成したコミュニティの活動が、美術館の集積という新たな観光資源を創造する流れを説明している。一方で、この先行研究で得られた集積過程を本研究にそのまま流用することは適切ではないと考える。まず研究の対象が美術関係施設に絞られているが、日本における「博物館」と「美術館」は、英語圏では“museum”という同一の概念として扱われており、美術館とそれ以外の博物館を完全に切り離して議論することは難しい。また植物園や水族館、動物園、自然史系博物館といった、歴史系博物館・美術館と同様の展示機能を持ち、地域の観光にも活用される施設が含まれていないため、観光という点にも注目する本研究においては、古本（2014）が想定する対象施

設だけでは不十分であると考える。

ここで研究対象とする施設をあらためて定義することにする。国際博物館会議 International Council of Museums (ICOM) が定める規約および日本の現行法上では、博物館という大きな枠組みの中に資料館、美術館、文学館、歴史館、科学館、水族館、動物園、植物園などが包括されている。さらに観光の対象として上記の施設が一般に広く認識されていることから、調査対象は資料館、美術館、文学館、歴史館、科学館、水族館、動物園、植物園などを含む展示施設（以下、ミュージアム）と定める。

次に方法について述べる。調査の範囲は行政区画上の箱根町として、まず箱根町という地域の特徴を確認するため、温泉開発や別荘地開発といった観点から地域の歴史を記述する。次に文献等から箱根町に存在するミュージアムの開館年や展示内容、場所、運営主体を調べ、一覧表を作成する。そしてこの表を元にその立地する場所と時代変遷を表す地図を作成する。この図表や、文献等から収集した設立目的・動機に関する情報を利用して、全国的なミュージアム設立ブームや他の集積地域と比較しつつ、箱根にこれらの施設が増加していく過程を考察する。また箱根の観光ガイドブックにおいてミュージアムがどのように扱われているのかを調査し、加えて箱根町を含めた神奈川県西部地域のミュージアムの連携を支援している神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会（通称WESKAMS）事務局に聞き取り調査を行い、ミュージアムが集まることでどのような利益が生じるのかについて述べていく。

II 箱根町の概要

箱根町は神奈川県の南西部、東京から約80kmの場所に位置している。北は南足柄市、東は小田原市、南は湯河原町、西は静岡県3市2町と接している。面積は92.8km²であり、この中で山林・池沼・原野は51.6km²と、実に5割以上を占めている。箱根町の中心には富士火山帯に属する複式火山の箱根山が位置している。箱根山はカルデラと中央火口丘、二重の外輪山で構成され、内側には堰止湖の芦ノ湖を形成している。現在でも大涌谷などで噴煙や硫黄などの火山活動が見られ、致死性の火山ガスを噴出する場所もある¹⁾。

次に産業について、平成24年経済センサス活動調査によると、2012年の従業者総数は13,623人であり、この中で卸売業・小売業の従業員数は1,288人、飲食店・宿泊業では7,964人であった。箱根町の産業において、特に飲食・宿泊業といった観光関連産業が重要な位置を占めて

いることがわかる。また箱根町の宿泊施設数と収容人数はともに徐々に減少している。寮・保養所は2004年には326軒であったところが2013年には193軒になり、収容人数も2004年の6割ほどの値になっている。観光客の消費額は2011年の東日本大震災の年にやや減少しているものの、おおむね2003年から2012年現在まで大きな変化はなく、宿泊費も2012年現在は2003年より増加している²⁾。以上のことから、保養所の撤退という現象が発生しつつも観光客消費額が微増している点から、箱根町は不況期であっても集客が安定した観光地であることが読み取れる。

また箱根の観光開発の歴史には、温泉が密接に関わっている。「箱根七湯」と呼ばれる湯本、塔ノ沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦之湯は鎌倉時代から病氣や怪我の治療に利用されていたが、江戸時代の後半に庶民の旅が盛んになるにつれて温泉観光地へと性質を変化させていった。明治時代に入ると、箱根の温泉場の主人たちは道路を始めとするインフラ整備を急速に進めていく。1885（明治18）年には小田原から湯本までの新道が開通し、1904（明治37）年には現在の国道1号線のルートである宮ノ下から箱根までの新道が開削され、人々の流れは旧東海道から温泉場を結ぶ新しいルートへと大きく変わっていった。鉄道については、東海道線の国府津駅から小田原を経由し、湯本までを結ぶ馬車鉄道を1888（明治21）年に開通させた。さらに1900（明治33）年には電化に成功し、1919（大正8）年には湯本と強羅を結ぶ登山鉄道が、1921（大正10）年には強羅と早雲山の間にケーブルカーが走るようになった。

また明治の初め頃には外国人の間で日光と並ぶ人気の避暑地となり、富士屋ホテルのように外国人向きの施設を備える旅館やホテルも現れた。芦ノ湖畔に設けられた箱根宿を訪れた外国人たちは、この地の民家を借り上げて「別荘」と称し、互いに交流を深めていった。さらに1884（明治17）年には芦ノ湖畔の塔ヶ島が、1894（明治27）年には宮ノ下に御用邸建設の建議がなされた。明治期に御用邸が相次いで設けられたことによって皇族の人々の来遊も盛んとなり、箱根は保養地としての名を一層高めることになった。

一方、箱根に日本人の別荘が増加していくのは大正時代以降である。特に小涌谷と強羅は、いずれも1887（明治20）年前後から開発の手が入った新しい温泉場であった。小田原電気鉄道（箱根登山鉄道の前身）によって湯本―強羅間の登山線の敷設と強羅一帯の温泉付き別荘分業事業が行われ、小涌谷と強羅は財界を代表する人々が別荘を構える高級別荘地としての地位を確立していった。

箱根の中でも高地に位置する仙石原や芦ノ湖畔では、日本人の避暑習慣が広まるにつれて別荘が増加していった。1935（昭和10）年前後から大規模な別荘分譲事業が展開され、さらに各企業による交通網の整備や温泉供給事業が進められると、これらの高原地域も新たに温泉観光地として整備されていくことになった。

箱根は1936（昭和11）年に国立公園となり、名実ともにトップクラスの観光地になった。戦後も復興が進むにつれて観光客が戻るようになり、高度経済成長期の到来によってレジャーブームが起こった。その中で戦前の別荘地はホテルや旅館、寮、保養所になって一般客に開放され、箱根は高級保養地から大衆観光地へとその性格を変えていった。このようにレジャーの大衆化が進む中で、企業間の箱根の開発競争は激しさを増していった。1950（昭和25）年から1968（昭和43）年の間には、「箱根山戦争」と呼ばれる小田急グループと西武グループの輸送シェア争いが起こり、道路網の整備や芦ノ湖上の大型船就航、ロープウェイの開通など、観光のための多様な交通機関が発達した。また大勢の観光客を迎えるために大型のホテルが次々と建てられたのもこの頃である。

現在は保養所の閉鎖などが見られるものの、観光地としての勢いは衰えていない。2013（平成23）年には富士山が世界文化遺産に登録され、国際的にもますます注目が高まっている。また2012（平成24）年には小田原市、箱根町、真鶴町、湯河原町を含む神奈川県西部エリアが日本ジオパークに認定された。ジオパークとは、地球科学的に見て重要な特徴や自然遺産、文化遺産を有する地域が、それらのさまざまな遺産を有機的に結びつけて保全や教育、ツーリズムに活用し、地域の持続的な経済発展を目指す仕組みである³⁾。このように、地域に古くからある観光資源を異なる角度から見直すような新しい動きも生じている。

Ⅲ ミュージアムが集まる場所・箱根

現在、箱根町には30のミュージアムが存在する。ここに既に閉館した施設を加えると、少なくとも44館園になる。このうち展示内容を人文科学系（歴史系博物館、美術館）と自然科学系（自然史博物館、動物園・植物園・水族館、科学技術博物館、産業博物館）の2種類に大別すると、人文科学系は現在23（スポーツ、おもちゃ、オルゴール、テディベアを扱う施設を含む）、閉館したものを含めると32館園、自然科学系は現在7、閉館済みのものも含めて12館園である。また運営主体によってミュージアムを公立と私立の二つに分けると、公立施設は現在9、閉館施設を加えて10館園であり、私立施設は現在21、

閉館したものを含めて34館園である。この数字だけを見れば、箱根町のミュージアムは自然科学系よりも人文科学系が、公立施設よりも私立施設が多いと判断できる。しかし町内という限られた行政区画の中に植物園や地質博物館といった自然史系博物館が多数存在することは、この地域の特徴的なところである。

また神奈川県内で箱根町以外にミュージアムが多い地域としては、横浜市が挙げられる。同市内には55のミュージアムがあり、特に神奈川県庁や横浜市庁といった行政機関や横浜赤レンガ倉庫、中華街のような有力な観光エリアが存在する横浜市中区には、22館園が立地している⁴⁾。ミュージアムの数では箱根町よりも横浜市の方が多いが、横浜市の総面積は箱根町の総面積の4.7倍である437.6km²であることから、ミュージアムの館数を総面積で単純に割ったミュージアムの密度は箱根町の方が高くなる。中区のみと比較すると、中区の面積は20.9km²であるから、1km²当たりのミュージアムの館数は1.06館になる。一方で箱根町の総面積から山林や池沼、原野といった建物が無いと考えられる土地を抜いた面積は41.2km²であるから、ミュージアムの密度はおよそ0.73館になる。参考までに人口が100万人を超える都市である神奈川県川崎市で同様の計算を行うと、1km²当たり約0.1館となる。このように、箱根町は神奈川県の中核的機能が揃う中区に次ぐほどにミュージアムが密集した地域であり、市町村単位で比較すると横浜市よりも多いということがわかる。

このほかには、古本（2014）が美術館・博物館の集積について研究した静岡県伊豆高原地域と長野県安曇野地域は、高原観光地域であること、温泉が湧出すること、別荘地であること、さらに伊豆高原地域は「伊豆半島」として日本ジオパークに認定されているなど、箱根町との共通点が多い。このように多様なミュージアムが集まっているスポットは日本のみならず世界的に見ても珍しい。

一方、箱根町に見られる独自の特徴として、温泉や豊かな自然といった観光資源が江戸時代から人々に利用されていたこと、明治時代は外国人の保養地であり、現在も国際的な観光地であること、皇族の御用邸が設置され、財界人、政府高官が利用する高級別荘地から、戦後のレジャーブームによって大衆観光地に変化したこと、温泉を中心に交通インフラが整備され、芦ノ湖遊覧船やロープウェイといった観光のための交通手段が多様であることなどが挙げられる。

これらのことを踏まえた上で、Ⅳからは時間、空間、設立理由、ミュージアムが集まる利益という四つの軸が

表1 箱根町のミュージアム一覧

名称	開館年	場所	運営	内容
箱根神社宝物殿	1907	元箱根	箱根神社	郷土資料, 美術
箱根強羅公園	1914	強羅	企業	植物, 公園
箱根博物館 (旧箱根関所考古館)	1930～ 閉館年不明	箱根	個人 (推定)	郷土資料
箱根美術館	1952	強羅	公益財団法人	古美術
小涌園熱帯植物園	1955～ 不明	二ノ平	企業	植物
箱根園国際村	1956～ 1975頃	元箱根	企業	建物
強羅公園箱根自然博物館	1958～ 不明	強羅	企業	自然科学
箱根関所資料館	1965	箱根	箱根町	郷土資料
箱根ビジターセンター	1966	元箱根	箱根町	自然科学
強羅公園熱帯野鳥館	1968～ 不明	強羅	企業	植物, 動物
彫刻の森美術館	1969	二ノ平	財団	彫刻, 現代美術
大涌谷自然科学館	1972～ 2003	大涌谷	箱根町	自然科学
旧街道資料館	1972	畑宿	箱根町	郷土資料
箱根湿生花園	1976	仙石原	箱根町	植物
畑宿寄木会館	1979	畑宿	箱根町	伝統工芸
箱根園水族館	1979	元箱根	企業	水族館
松田建物ボルシェ博物館	1981～ 2000頃	仙石原	個人	車
箱根町立郷土資料館	1983	湯本	箱根町	郷土資料
箱根ベゴニア園	1986～ 2011	塔ノ沢	企業	植物
成川美術館	1988	元箱根	個人	日本画
箱根芦之湯フラワーセンター	1988	芦之湯	箱根町	自然科学
リ・カーヴ美術館	1989～ 2007	仙石原	企業	西洋絵画
箱根早雲山美術館	1990～ 不明	強羅	個人	陶磁器, 西洋美術
星の王子さまミュージアム	1991 2004再	仙石原	企業	『星の王子さま』関係資料

名称	開館年	場所	運営	内容
箱根町立森のふれあい館	1991	箱根	箱根町	自然科学
箱根武士の里美術館	1991	仙石原	個人	甲冑, 刀など
本間寄木美術館	1994	湯本	個人	伝統工芸
箱根ガラスの森美術館	1996	仙石原	企業	ガラス工芸
箱根北原おもちゃミュージアム	1998 2010再	湯本	企業 (個人)	おもちゃ
オルゴールの小さな博物館箱根	1998～ 2006	湯本	個人	オルゴール
テディベア・ミュージアム	1999～ 2003	元箱根	企業	テディベア
箱根芦ノ湖美術館	1999～ 2006	元箱根	企業	西洋絵画
箱根マイセンアンティーク美術館	2000	強羅	個人	陶磁器, 庭園
ポーラ美術館	2002	仙石原	財団法人	西洋絵画, 日本画等
箱根写真美術館	2002	強羅	個人	写真
箱根ラリック美術館	2005	仙石原	個人	工芸
箱根駅伝ミュージアム	2005	箱根	企業	駅伝関係資料
平賀敬美術館	2005	湯本	個人	現代美術
函嶺・ふる里集蔵館	2005～ 休館	箱根	個人	古美術等
玉村豊男ライフアートミュージアム	2007	元箱根	個人	絵画
村田アンティーク美術館	2012	仙石原	個人	陶磁器
岡田美術館	2013	小涌谷	企業	日本画等
関所からくり美術館	2013	箱根	個人	伝統工芸
箱根ジオミュージアム	2014	大涌谷	箱根町	自然科学

(筆者作成)

ら, ミュージアム集積の過程とその影響について考えてみる。

IV 箱根町のミュージアム集積の過程

1. 時系列の分析

まずは箱根のミュージアムがいつ, どれくらいの数が建てられたのかということを整理してみる。箱根町のミュージアムの開館年と閉館年, 場所, 展示内容, 運営主体は表1にまとめている。

ここから開館年に関する情報を抜き出すと, まず初めの博物館の施設として箱根神社宝物殿や強羅公園がつく

られている。ここから期間が空いて, 1954 (昭和29) 年から1973 (昭和48) 年の高度経済成長期の前後には箱根町立の博物館のほか, 箱根美術館や箱根彫刻の森美術館などの個性的な私立美術館が現れている。以降は箱根湿生花園や箱根郷土資料館などの町立施設に加えて, 企業や個人によるミュージアムが多数開館した。特に1986年から1991年のバブル景気の間には五つの私立美術館が建てられている。

古本 (2014) によると, 伊豆高原地域と安曇野地域では1990年代前半に美術館の設立ラッシュが起こったとあるが, 箱根では2000年以降に設立されたものも多い。美

術館だけに絞っても1994年から1999年の間に7館、2000年から2005年の間に5館、2006年から2014年の間に3館が新設されており、この中にはポーラ美術館や岡田美術館といった比較的大規模な美術館も含まれている。ただしポーラ美術館は計画から開館まで10年を費やしていることから、展示の規模や運営主体などの諸要素は、同時期に開館した他のミュージアムよりも1990年代前半に開館した施設に類似している。

また調査した期間の中ですでに閉館した施設は13館であり、この中にはボルシェ、テディベア、オルゴール、西洋絵画といった、地域と関連性の薄い展示内容の施設が多く含まれている。これは古本(2014)に見られた「展示物の『質』や施設構成における観光地域間の同質性への批判、入館者数の分散・減少に耐えられない施設の閉館」という現象と同様のものが、箱根においても発生していることを意味していると考えられる。

ここで、箱根におけるミュージアム設立の時期と、全国規模のミュージアム設立ブームが起こった時期を比較してみる。日本ではミュージアムの設立ブームといえるような現象が数回発生している。まず、最初のブームは1910年前後、明治末から大正初年頃である。1872(明治5)年に文部省博物館によって開催された「博覧会」(東京国立博物館の前身)や、1877(明治10)年の教育博物館(国立科学博物館の前身)を契機に、国立・公立・私立を問わず全国に博物館がつくられた。また1897(明治30)年に「古社寺保存法」が制定されたことにより、文化財保護思想の普及と海外流出防止が図られる一方、指定文化財は博物館へ出品することが義務付けられ、社寺に博物館が多数設けられた。

2回目の設立ブームは昭和初期の1930年前後である。この時期には昭和天皇の御大札や関東大震災からの復興も兼ねた各種事業が行われ、その中で「博物館事業促進会」が発足した。同会は各府県の知事に対して、大札を記念して博物館をつくるように市町村へ呼びかけるように要請するなど、博物館建設の機運を促進する活動を行った。

3回目は1960年代後半から1970年代である。1951年の「博物館法」で博物館が社会的な機関として制度化されたことにより博物館建設の機運が高まっていたこともあるが、1968(昭和43)年が明治100年に当たる節目であったことから、高度経済成長も相まって記念事業として多くの博物館が建てられた。この時期には国立民族学博物館や国立歴史民俗博物館に加えて、出光美術館や足立美術館など、各地に特色ある優れた私立美術館が生まれた。

4回目のブームは昭和と平成という時代の転換期であ

る1980年代後半から1990年代前半である。1980年代後半のバブル景気の中、県市町立、区立の公立博物館や、企業博物館、個人の私立美術館が数多く誕生し、1990年には2800余り、多い時には年間100館園を越す建設が続いた。しかしそれもバブル崩壊とともに陰りがでてきており、縮小・閉館する施設も発生した。

以上から、ミュージアム設立ブームは何らかの記念の年や景気の良い時期に起こることがわかる。それでは、これら通算4回のミュージアム設立ブームの中で、箱根町のミュージアムはどこに位置づけられるだろうか。まず1回目のブームには箱根神社宝物殿と強羅公園が、2回目のブームには箱根博物館(旧箱根関所考古館)が当てはまる。3回目の設立ラッシュには箱根関所資料館や彫刻の森美術館、大涌谷自然科学館、箱根湿生花園といった九つの施設が該当する。この中で町立の施設は6館園であり、箱根町に現存する公立施設の半数以上がこの時期に建てられたことになる。4回目の設立ラッシュ時に建てられたものは全部で10館園であり、箱根・芦ノ湖成川美術館や町立芦之湯フラワーセンター、星の王子さまミュージアムなどが当てはまる。

ここまでは、日本全国における設立ブームと箱根町においてミュージアムが増加した時期はおおむね一致している。それでは、4回目の設立ブーム以降に建てられたミュージアムにはどのような特徴があるのだろうか。表1に戻って展示内容や運営主体などに注目してみると、まず1990年代後半は企業立の博物館であるガラスの森美術館と芦ノ湖美術館のほかに、箱根ガーデンミュージアムや箱根ピクニックガーデン(現芦ノ湖パノラマパーク)といった、特定のエリア内の一施設としてつくられた小規模ミュージアムで占められている。そして2000年以降はポーラ美術館や岡田美術館といった大規模施設も見られるものの、全体的な傾向としては箱根町出身の画家や写真家の美術館、個人運営の小規模な施設が増えている。このように、この時期に設立されたミュージアムの数から判断すれば4回目の設立ラッシュは今も続いているとみなすことができるものの、個々の施設の規模は縮小傾向にあり、設立ブームは徐々に沈静化へ向かっていると見えるだろう。

以上から、箱根町のミュージアム設立時期は全国的なミュージアム設立ラッシュが起こった時期と重なり、特に第三次、第四次設立ブームの影響が強いことが伺える。また伊豆高原地域や安曇野地域と比較して、箱根町では最後の第四次設立ブームの勢いが長く保たれているということがわかる。

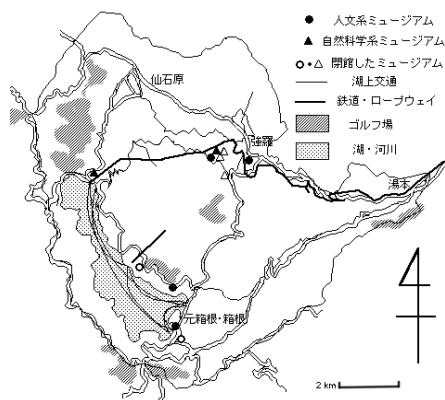


図1 箱根町のミュージアムの分布（1969年まで）
（筆者作成、以下、図5まで同様）

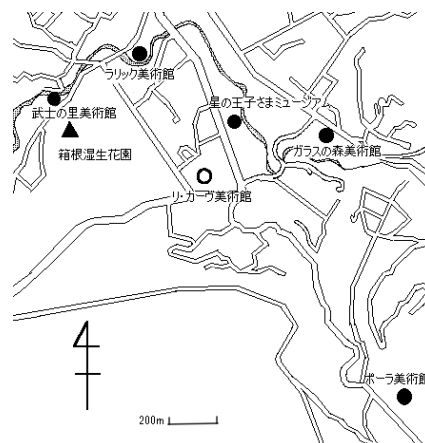


図5 仙石原地域のミュージアムの分布（2014年）

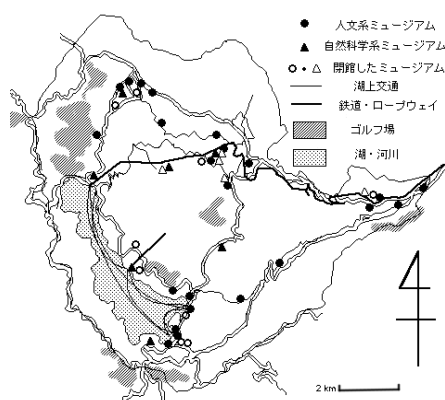


図2 箱根町のミュージアムの分布（1970～2014年）

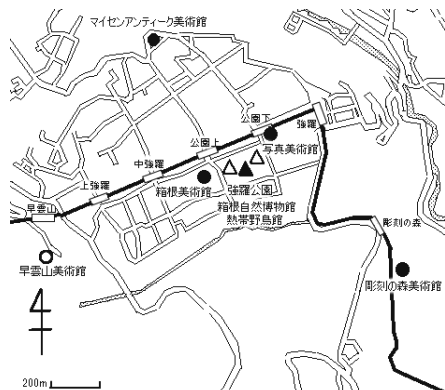


図3 強羅地域のミュージアムの分布（2014年）

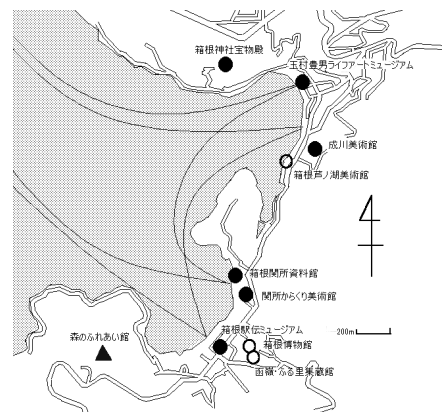


図4 元箱根・箱根地域のミュージアムの分布（2014年）

2. 立地の分析

次にミュージアムが箱根町のどこに、どのように集ま
っていくのかを分析する．まずは箱根町全体の地図を見
てみる（図1，図2）．ここから，1960年代までは強羅公
園内や芦ノ湖畔の箱根地域に点在していたが，2000年以
降はこれらの地域と仙石原，箱根湯本を中心に集積が進
んでいる様子がわかる．また温泉場とミュージアムの密
集する場所がほぼ一致していることが読み取れる⁵⁾．

さらに図2の中で特にミュージアムが密集している地域である強羅、仙石原、元箱根南西部・箱根について詳しく見てみる。図3は強羅地域の、図4は元箱根南西部・箱根地域の、そして図5は仙石原地域のミュージアム分布を表している。

箱根神社、関所などの歴史の古い観光スポットがある元箱根・箱根、鉄道資本による別荘開発が古くからなされていた強羅においては、ミュージアムも1969年以前から存在している。強羅では強羅公園内の一施設として設立されたものや箱根美術館、彫刻の森美術館といった年代の古いミュージアムが多く、おおむね箱根登山鉄道沿いに位置している。また箱根美術館や写真美術館、早雲山美術館など、箱根で活動する人物による美術館が比較的集中している。この点は、古本（2014）の美術施設集積過程の初期段階である「地域において一定量の別荘開発が行われ、芸術活動に対する関心を持つ地域住民・移住者の活動により、いくつかの美術館が設立される。」という部分に類似している。ただし強羅のこれらのミュージアムは開館年代に大きな開きがあるため、これを集積の第一段階としてとらえるにはやや難がある。

元箱根・箱根エリアでは、全てのミュージアムが芦ノ湖沿岸の道路沿いに分布していること、箱根町の自然や文化、歴史を扱った施設が多いこと（関所資料館、関所からくり美術館、森のふれあい館など）が特徴である。

また現代日本画を扱う成川美術館のように、この地域のミュージアムは全体的に和風・日本的なイメージを持っている。一方で仙石原では湿生花園以外の施設がバブル景気以降に設立されており、庭園や自然遊歩道を設けるなど、自然と施設の調和を意識した美術館が町内の他の地域よりも多い。さらに湿生花園と武士の里美術館以外の施設はガラス、西洋絵画、宝飾といった西欧的なイメージのある資料を主に展示しており、仙石原で最も古い博物館施設である湿生花園の周りを囲むようにミュージアムが増加しているように見える。

温泉場とミュージアムが集中する場所が一致する理由として、まず温泉を中心に近代の交通インフラが発達していったという箱根町の歴史が挙げられる。旅館やホテル、ゴルフ場などの他の観光関連施設も同様に温泉やその周辺の交通機関に隣接して立地しており、これは言い換えれば、ミュージアムは町の中でも特に発展している地域に集中しているということである。

さらに1967年から販売されている箱根フリーパスなどの周遊券の存在が、主要交通機関の近隣にミュージアムを集中させる要因になっているのではないかと考える。特に箱根フリーパスは、小田急グループの会社が運営する交通機関（箱根登山線、ケーブルカー、ロープウェイ、箱根登山バス、箱根海賊船など）を、基本2日間自由に乗り降りできる周遊券であり、このフリーパスを最大限に利用した箱根一周ルート（箱根湯本駅－強羅－大涌谷－芦ノ湖－元箱根・箱根－湯本などで宿泊）は、箱根観光の定番として「箱根ゴールデン・コース」と呼ばれている。図1において、ミュージアムは早くに観光開発された強羅や関所、箱根神社などの限られた場所にしか存在しなかったが、図2では登山鉄道や登山バス、遊覧船の港付近に増加していることから、このような箱根観光の王道ルートの存在が少なからず影響していることが読み取れる。

また、元箱根・箱根地域と仙石原地域のミュージアムの性質の違いは、ミュージアムが集まる前に存在していた史跡や施設の性質に影響されていると考えられる。元箱根・箱根には箱根神社、関所という史跡や宿場町としての歴史といった地域性が、仙石原には箱根湿生花園やススキ草原などの、植物を中心とした自然の観光スポットが存在する。このような地域の特性が、歴史的・日本的なミュージアムと自然を意識した美術館といった差異を生じさせているのではないかと考える。

以上から、箱根町では古い観光施設や史跡のある地域からミュージアムが増加していること、地域ごとにミュージアムの傾向が異なり、それは地域の性質に影響され

ていること、交通の発達した地域、特に観光ルートとなっている場所に多数立地していることなどがわかる。

3. 設立目的の分析

それでは次になぜ、どのような目的で箱根にミュージアムを建てたのかということについて分析する。施設のパンフレットや書籍、観光ガイドブック、Webサイト等から設立目的や箱根を選んだ理由、事情などを収集し、その内容によってミュージアムを分類すると、大きく4種類に分けることができる。それは①歴史や文化、自然といった、箱根の地域資源を紹介・保全・継承することを目的とするもの、②ミュージアムの空間づくりを重視する中で、箱根の豊かな自然環境に着目したもの、③有名な観光地、国際的に知られる場所といった、箱根の歴史から生じた地域の特性に注目したもの、そして④箱根に住んでいる、事業を行っているなど、箱根と繋がりのある人物の活動によってつくられたものである。

まず①は公立・私立ミュージアムの両方に見られる理由である。たとえば箱根湿生花園は、国の天然記念物に指定された区域にある特徴的植物の保護・育成と、日本全国に点在する湿原地帯の植物を集め、広く一般に紹介することを目的としている。私立では、箱根の伝統工芸である寄木細工をテーマにした施設や、箱根駅伝の歴史などを説明する箱根駅伝ミュージアムなどが挙げられる。また武士の里美術館のように、個人の趣味として収集した武具・甲冑のコレクションに、武士とも関わりの深い箱根の歴史を結びつけている施設もある。

②は私立ミュージアムの中でも特に美術館でよく見られるものであり、自然と美術の調和を強調して、展示のほかに施設からの眺望を目玉にしている館もある。この背景には、来館者に豊かな自然の中でくつろぎながら美術鑑賞をしてもらいたいという考えがある。また②を挙げるミュージアムはバブル景気以降に開館した施設が多い。

③も私立のミュージアムに見られる理由の一つであり、箱根園の内部に位置する箱根園水族館のように、観光エリア内の1施設として建てられたものもここに含めている。また箱根の国際性を重視する背景は館によって異なり、たとえば星の王子さまミュージアムは、『星の王子さま』の作者であるサン＝テグジュペリ生誕100年を記念した世界的事業の一環として創設されたという事情から、日本を代表する観光地の一つとして世界的に知られている箱根が選ばれた。ほかに国際性に注目しているミュージアムには武士の里美術館と彫刻の森美術館がある。

④は個人運営のミュージアムに多く当てはまる理由で

ある。さらにここから、生業に関係なく趣味的に収集したコレクションを展示するものと、芸術家や伝統工芸の職人が自身の作品やこれに関連したコレクションを展示するものという2種類に大別できる。また④のミュージアムはオーナーの職場の一部やその近辺、自宅等を利用して開館されることが多い。ただし箱根駅伝ミュージアムのように、①の目的が強いミュージアムはこの限りではない。

ここまでミュージアムが箱根に開館した主な理由を見てきたが、箱根町のミュージアムがそれぞれのカテゴリーに明確に分類できるものではなく、これらの理由が複合して設立に至っている。特に郷土資料館や自然博物館、芸術家や文化人が個人で設立した美術館は①と④、企業や個人によって設立された規模が大きく、かつ展示内容が地域と直接関係のない美術館は②と③の両方の理由を持っていることが多い。

ここで箱根町にミュージアムが集中する理由を考える。まず①のタイプが増える要因としては、自然や文化、歴史などの箱根の地域資源そのものが博物館資料として保存・研究・鑑賞される価値を持っているということが大きい。また私立の美術館などでは、ミュージアム開設は美術品収集という趣味のゴールとなることが多く、ミュージアム設立を決定してから展示品を集める、というケースは少ない。そして開設を決めた際に、所持しているコレクションの性質や、どのような空間にしたいか、どんな人に見てもらいたいかということを考え、これらの構想に合った地域を選択する。②と③の理由を挙げるミュージアムの多くはこのような過程を踏んでいるのではないかと考える。

つまりミュージアムは地域と完全に分離して設立されるものではなく、展示内容にかかわらず何らかの地域の性質と繋がっているということになる。そして箱根は豊かで個性的な自然や文化、保養地として人々に癒しを提供してきた歴史、国際的に有名な観光地、東京からのアクセスの良さ、確立された観光ルートなど、ミュージアムを引きつける要素が多数存在する場所であり、このことが他の地域と比べて格段にミュージアムが密集している理由の一つであると考えられる。

また、②の理由を挙げる設立主体が、ミュージアムを寛ぎや癒しの空間とみなしていることも気になる点である。というのも、②のようにミュージアムを自然と調和する開放的な空間ととらえる発想は、日本では比較的新しいものであるからだ。1970年以前は、ミュージアムは人々に「古臭いものの置き場」、「堅苦しい」といったマイナスのイメージを持たれていた。1970年の大阪万国博

覧会以降、ミュージアムは徐々にプラスの印象に変化していき、バブル崩壊以降は「知的娯楽センター」とみなされるようになった(石渡ほか 1996)。このようなイメージの変化は博物館を扱った文献等で確認することができる。たとえば『かながわの博物館』(大戸 1984)では、序文に「博物館というと、だれでもまず古めかしい建物を連想し、その中にとりわけ価値の高い文化遺産が、厚いガラス越しに陳列されている光景を、思い起こすに違いない。しかし今日的な博物館の機能は…」とあるように、「ミュージアムは古い、堅苦しい」というイメージが人々の共通認識であることを前提としている。

一方、箱根では彫刻の森美術館(1969年)や箱根・芦ノ湖成川美術館(1988年)などによって、早い時期から自然と芸術の調和を意識した空間づくりが行われている。特に彫刻の森美術館は日本初の野外美術館として、日本の美術界だけではなく、世界の多くの美術家とマスコミの注目を集めた。このセンセーショナルな美術館の開館という出来事と、博物館に対する人々のイメージの変化、箱根町におけるバブル期以降の設立ラッシュの間に、何らかの関連性があるのではないかと考える。彫刻の森美術館の開館によって人々の間に「開放的なミュージアム」という新しい概念と箱根という場所が強く印象づけられたことで、博物館イメージが変化する過渡期であるバブル期以降に、②のような理由を掲げたミュージアムが箱根に集まったのではないかと想像する。

また、高度経済成長期やバブル期の金銭的な豊かさ、そしてそれを表すステータスである芸術品のコレクションと、保養地、レジャーといった「癒し」、「贅沢」、「日常からの解放」というイメージのある箱根や伊豆といった場所を結びつけたことが、「ミュージアム=寛ぎの空間」というイメージを生じさせたという可能性もある。

いずれの場合であっても、温泉という資源から生じた「寛ぎと癒しの空間」という箱根の地域性が、ミュージアムを集める要素の一つであることに変わりはない。

4. ミュージアムが集まる利益

最後に、町内にミュージアムが集まることによってどのような利益が生じているのかについて考えてみる。まず利益の一つとして、ミュージアムが密集していること自体が観光資源になることが挙げられる。『るるぶ箱根'12』(2011年)、『楽楽 箱根』(2014年)、『ことりっぷ 箱根』(2010年)、『ブルーガイド プチ贅沢な旅 箱根』(2012年)では、それぞれの雑誌が「アートのスポット」として仙石原のミュージアムを紹介している。箱根町の中でも特に仙石原地域においては「芸術」、「ミュージア

ム」が観光資源として強く認識されていることが伺える。

また町内に多種多様なミュージアムが集積していることは、観光客にとってはテーマ性のある旅が実行しやすくなるという利益がある。たとえば『楽楽 箱根』では仙石原と元箱根・箱根を巡る「ミュージアム三昧」というルートのほか、「箱根の歴史を肌で感じる」というテーマで芦之湯フラワーセンターや箱根駅伝ミュージアムを組み込んだ旧街道ハイキングルートを提案している。また箱根ジオパークの活動の中で箱根町立郷土資料館を始点とした箱根湯本のルートと、ビジターセンターから大涌谷までを歩く軽登山ルートが紹介されている。このように、ミュージアムは文化・歴史・自然をめぐる旅行をする際にはその拠点や目的地となりうる存在であり、それぞれの施設が地理的に近い場所に存在していることで、このような観光をする旅行者の利便性が増すというメリットが生じる。

ここでミュージアムの運営者と利用者の両方の利益を表す例として、神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会の活動がある。この連絡会は1996年に、小田原市入生田にある神奈川県立生命の星・地球博物館の当時の館長が「ミュージアムのネットワーク化をはかり、新しいミュージアムのあり方を考えていこう」と周辺施設に呼びかけたことが始まりであり、発足以降は毎月1回、加盟館が持ち回りで「ミュージアム・リレー」という活動を行っている。これはミュージアム施設が連携し、情報交換や相互理解のために互いの施設を訪問・見学するというものである。また一般からも参加することが可能であり、この場合は通常よりも安い値段で施設に入館できる上に、ミュージアム・リレー専用の特別な解説やイベント等を楽しむことができる。連絡会の主な範囲は小田原市や箱根町、湯河原町、真鶴町などの神奈川県西部地域であり、現在箱根町のミュージアムの7割以上がこの連絡会に加盟している。

連絡会の活動による利益の中で具体的なものとしては、ミュージアム・リレーがきっかけの一つとなり、1998（平成10）年から「観光施設めぐりバス」（箱根登山バス・小田急）が直通運行され、沿線10カ所のミュージアムが利用しやすくなったこと、学校教育と私立美術館の間に協力関係が生まれたこと、近隣のミュージアムで共同の企画を実施するなど、連携がより親密になったこと、小規模なミュージアムにとっては大きな宣伝効果があることなどが挙げられる。また一般参加者の多くが県西地域在住の常連であることから、地域住民とミュージアムの親交を深める機会の提供という役割も果たしている。

ただし、ミュージアム・リレーは私立の施設であって

も時には参加費を無料にすることから、連絡会の活動に参加することによる金銭的なメリットはあまりない。加盟施設の多くは、同業者との情報交換・連携によって保存・研究・展示というミュージアムの核となる部分をさらに向上させられる、地域との人的な繋がりができるといったメリットを重視している。

連絡会の事務局によると、予算がないという制約のため連絡会の広告が神奈川県東部にまで行き渡らず、連絡会に対する一般の認知度は低いという。そのため新しくできたミュージアムに対しては基本的に連絡会の方から勧誘している。このような事情から、連絡会の存在とその利益を理由に箱根にミュージアムをつくる、という流れはないと思われるが、連絡会を通じて施設同士や地域間に協力関係を築くことで、ミュージアムが長く存続するための土台が形成され、このことが「箱根はミュージアムが多い地域」という現状を保つことに繋がっているのではないかと考える。

V まとめ

本研究は、観光地として長い歴史を持つ箱根町においてミュージアムの集積という現象があることに注目し、主に資料分析、一部について聞き取り調査等を通じて時系列、立地、設立目的、集積の利益という視点からミュージアムの集積過程を分析した。

その結果を以下にまとめる。まず日本全国でミュージアム建設の機運が高まっていた時期と、箱根町のミュージアムが開館した時期はほぼ一致しており、ブームは沈静化しているものの現在も数が増加していることが判明した。立地に関しては温泉場および主要交通機関の周辺に集中しており、箱根観光の定番ルートの影響も考えられる。また強羅、仙石原、元箱根・箱根といった町内でも特に集積が目立つ地域では、ミュージアムの傾向が地域ごとに異なっており、これは地域内の既存施設や歴史等の影響によるものであると推察した。そしてミュージアム設立の目的や理由には何らかの地域の性質が関係しており、箱根町はミュージアムを引きよせる要素が多い地域であること、ミュージアムと地域は完全に分離して存在することはないということを考察した。また聞き取り調査から、ミュージアム集積から生じたコミュニティの活動が定期バスの運行という観光事業に影響したこと、同業施設や地域との人的繋がりによるメリットが存在することが判明した。そしてこのような人的繋がりが施設の持続という点に影響し、ミュージアムが多数存在する地域という現状を維持する作用を果たしているのではないかと考えた。

今後の課題として、まず箱根町ではミュージアムの集積という現象自体がミュージアムを引きよせる要素となっているのかどうかを調査することが残されている。また今回は観光ガイドブックやパンフレットなど、観光客の受け入れ側が想定する観光ルートの一部を紹介するにとどまったが、今後は旅行者の行動を詳細に調査し、実際の観光にミュージアムがどのように活用されているかを分析することが必要である。さらに他のミュージアム集積地域についても集積過程を詳細に分析し、箱根町などの複数の地域と比較して共通点や差異を抽出するといった、マクロ的な分析を行うことも課題であると考えている。

注

- 1) 箱根町Webサイトによる。http://www.town.hakone.kanagawa.jp/hakone_j/gyosei/aramashi/aramashi_f-03.html (最終閲覧日2014年12月8日)
- 2) 箱根町Webサイト内「統計はこね」による。http://www.town.hakone.kanagawa.jp/hakone_j/ (最終閲覧日2014年12月8日)
- 3) 箱根ジオパークWebサイトによる。http://www.hakone-geopark.jp/ (最終閲覧日2014年12月9日)
- 4) 横浜観光情報・ミュージアムマップによる。http://www.welcome.city.yokohama.jp/ja/tourism/museum/museum-map.html (最終閲覧日2014年12月1日)
- 5) 箱根ナビ・箱根十七湯ガイドによる。http://www.hakonenavi.jp/basics/hot-sp/17h-sp/ (最終閲覧日2014年12月8日)

文献

- 青木順子編 2014.『楽楽 観光⑤箱根』JTBパブリッシング。
石渡美江・熊野正也・松浦淳子・矢島 國編, 倉田公裕監修 1996.『博物館学事典』東京堂出版。
伊藤寿朗 1993.『市民のなかの博物館』吉川弘文館。
井野口正之編 2011.『るるぶ情報版 箱根'12』JTBパブリッシング。
大戸吉古 1984.『かながわの博物館』神奈川合同出版。
神奈川県博物館協会編 1978.『神奈川県の博物館』中央公論美

術出版。

- 椎名仙卓 1993.『図解 博物館史』雄山閣出版。
志水竜一編 2010.『ことりっぷ 箱根』昭文社。
新人物往来社編 2003.『日本全国おすすめユニーク美術館・文学館』新人物往来社。
新人物往来社編 2006.『日本全国いちおしユニーク美術館・文学館』新人物往来社。
水藤 真 1998.『博物館を考えるー新しい博物館学の模索』山川出版社。
全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 2008.『新しい博物館学』芙蓉書房出版。
竹内 誠監修 2010.『知識ゼロからの博物館入門』幻冬舎。
彫刻の森美術館編 1969.『彫刻の森美術館・開館の記録』彫刻の森美術館。
西村孝昭 1993.『美術館散歩inかながわ』神奈川新聞社。
日外アソシエーツ編集部編 2008.『個人コレクション美術館博物館事典 新訂増補』日外アソシエーツ。
野田正穂・原田勝正・青木栄一・老川慶喜編 1996.『神奈川の鉄道 1872～1996』日本経済評論社。
箱根町立郷土資料館 1996.『開けゆく別荘地・箱根ー企画展 開けゆく別荘地・箱根史展図録』箱根町立郷土資料館。
箱根の自然と文化研究会編 1991.『箱根を歩く 改訂新版ー自然と歴史を訪ねて』神奈川新聞社。
ブルーガイド編集部編 2012.『プチ贅沢な旅…⑥「箱根」』実業之日本社。
古本泰之 2014. 観光地域における「芸術活動」の観光資源化としての美術館集積ー静岡県伊豆高原地域・長野県安曇野地域を事例として。日本国際観光学会論文集 21: 71-76。
細川いづみ編, 公益財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館監修 2012.『きょうは一日ポーラ美術館で。ーポーラ美術館ガイドブック 箱根の自然と名作アートに親しむ』武田ランダムハウスジャパン。

すずき・なつみ (63期卒)
東京都庁

On the Agglomeration Process of Museums in the Hot-Spring Resort of Hakone

SUZUKI Natsumi (Tokyo Metropolitan Government)